

市民と市長との対話集会会議録【要旨】

令和 6 年 4 月 12 日 加子母林材振興会

開会

加子母林材振興会 会長あいさつ

森というのは、シン中津川市の「シン」の 1 つであると思います。森林、林業、木材の加工についての取り組みや、夢の一端を聞いていただき、市長にもお話しいただければと思っている。どうぞよろしくお願いします。

市長あいさつ

中津川市は広いまちで、加子母から馬籠、阿木まで、広いエリアの市民の皆さんと、エリアそれぞれの良さを生かしながら、このまち全体を作っていく。各地域のまちづくりを一つに合わせ、中津川市全体のまちづくりにつなげていきたい。市民の皆さんの声を少しでも市政に反映させていきたいという思いで対話集会を企画した。

皆さまから今の実情もしっかりとお聞きしながら、どんなことができるのか、一緒になって、森を生かす、木を生かすことを考えながら、いろんなご意見をいただき、前向きな話になればと思っている。限られた時間ですがどうぞよろしくお願いします。

構成団体の説明（略）

市長

加子母地区の、木を通した皆さんのつながりがすごいと思っている。市役所でもネットワークを大事にするようにと話しているが、各団体さんが横連携、そのつながりがしっかりできているというのが第 1 印象。

日本は山が多い、木材に携わる方も多いと思うが、こういう連携がとれるというのは、全国的にもモデルケースになるのではないかな。製材から、森の整備、製材から加工と一連で連携が取れているところを、中津川市から、県内県外、全国に発信し、そうすることで、東濃桧のブランド力がまた上がるような取り組みにつながるのではないかな、一緒になって中津川市の東濃桧、木材、山を P R していけないかと思う。

参加者

加子母は「完結型林業」ということでテレビや新聞に取り上げてもらったことがある。加子母の今のあり方は、これをうまく動かすために林材振興会を作った。名古屋城の復元に加子母の木を 60 本ぐらい出した受け皿にもなった。伊勢神宮の遷宮に際し、来年から、また伐採が始まる。前は、この裏木曽内で 2,400 本、伊勢神宮に持っていった。木曽ヒノキの大木はもう奥の方にしか残っていない。中津川市の林業についても一緒になって P R をしてくれるので、全面的な協力をお願いしたい。

参加者

特に来年は御杣始祭（みそまはじめさい）が加子母と付知を中心に始まっていく。その前に山口祭というのがあるが、一連の行事の中で御杣始祭が裏木曽と、木曽でやられる行事が一番事始めで、奉賛会でやることになっている。

市長

前は加子母、付知地域を中心にやったのを、来年はぜひ中津川市全域でやりたい、こちらでやりながらJR中津川駅前でもやったらどうかというお話があり、ぜひ一緒にやっていきましょうと、これから連携を取っていくところ。中津川市としても全国に誇れることだと思っている。観光と言うか、中津川市をよりよく知ってもらい、こんな木が伊勢神宮で使われるというところをPRしながら、ぜひ一緒に考えている。

参加者

立ち木のままで三ツ緒伐りを枯らして、乾燥させた木材の販売を始めたけど、始めた時に比べると木材の値が下がって、結局なかなか付加価値がつかなくてだめになった。

その後、市からの助成を受けて、土地を借りて家を作って移住定住に取り組んだ時には、6世帯、子どもが12人来た。名古屋の人をバスで連れてきて、ウォーキングしたりして加子母の良さを見てもらったが、市の助成が切れたので、今はやってない。

それから、今は和室が少ないので、木のPRになるからと名古屋市長に話して、六畳に床の間がついた「組み立て和室」を名古屋市の学校の中に1棟ずつ、年に14、15棟ずつぐらいやってきて、もう4年。今年も、何とかできればと取り組んでいる。

ヒノキを使った家は一番いい材料を使うが、県内よりも名古屋の方が理解を得られるので、名古屋へ出た方がいいということでやっている。

参加者

林材業に携わる団体は、高齢化で、先日、最高齢で90歳近い人が亡くなり、今は最高齢が80歳。あとはもう60、70歳という人ばかり。若い人が入ってくれない。やはり何か魅力がなくなってきたと感じる。何とか市の方で援助いただいで続けていきたい。

参加者

先祖が尾張藩で山守をやっていたもので、江戸時代の3万件の古文書を持っていて、外部の有識者が協力して整理調査をしていただいている。調査研究とそれを活用していくのが一番大事と思っている。加子母は本当に林業、森林に対して協力してやっているが、そこに少しでも歴史的なつながりの部分や背景をしっかりと組み立てて、作り上げていくことも一つのネタとしていいかと思う。林産業も住宅も活用できるし、インバウンドなど観光面でも活用できる。加子母にこだわらず、付知や川上、遠くは三浦山（みうれやま）、王滝村とも関連する資料を整頓している。個人の資料館だが、ある資料をなるべく広く出そうと思っている。

参加者

山守の 17 代目の妹が、今の至学館大学昔の中京女子大の創設者。名古屋女子大も初代の理事長は、ここの出身。

市長

加子母にあると市でPRしないといけない。資料館にもいかなければと思う。

参加者

1 度はウッドショックで木材が値上がりしたが、それとともにいろんな部材が値上がりし過ぎて、今、サラリーマンはなかなか家が建てられない。木材にしわ寄せが来て、価格が相当低迷しており、市場によっては在庫過多になって、輸入材も増えているなかで国産材をいかに使ってもらうかを一生懸命、研究しているが、なかなかうまくいかない。

ロシア産、北欧産の材料が、丈夫かどうかは別として、非常に使いやすい。それを商社が研究して、非常に使いやすい材料がどんどん入ってきている。最終的に国産の木材がどこまで使えるかは非常に厳しいところ。

昨年度まで市内産の木材を仕入れると、製材業者に、1 立方メートル当たり 1,000 円、1,000 立方メートルまで、100 万円までの助成金があった。今年度 3 月末に市に助成金を申請したら、7 割になっていた。予算の関係もあったと思うが、新年度から何も予定はないと。加子母の市場の原木は他と比べて安くはないので考慮してほしい。

参加者

年代ごとにいろんな課題があって、私たちはいろいろ話し合いながら、また提案させていただきたい。その時にはぜひ、お願いしたい。

市長

高齢化の問題、雇用の問題、後継者については、林材業に携わる方たちだけでなく、どの業界でも共通で、手を打っていかねばと思う。

林材業特有なのは、木の価格。今、家を建てる費用が上がっているが、木の値段ではなくて、ドア、キッチンとかトイレといったものの値段が上がって、おのずと家の値段が上がってってしまう。木の値段はウッドショックでは回復したかもしれないが、そんなにも上がってきているわけではない。木の値段をどうやって上げていくのか。その 1 つは森林組合さんがやっている加工、付加価値をつけるということだと思う。加工によって付加価値をつけて販売することも 1 つの方法。そもそも木の値段がどうやったら上げていけるのか、そう簡単なものじゃないことは重々承知だが、こうやったら売れるのではないかというような話ができるといい。

参加者

例えば新しい小学校の計画があるときは、中津川市産の木材を使うという計画にしていた

だけると非常にありがたい。福岡小学校の時はウッドショックと重なって原木の取り合いで大変だったが、平時のときなら地元の木がどんどん出ていったと思う。今後中津川市でいろんな建物とか、公共工事をやられるときに、ぜひ中津川市産材を使うようなことをやっていただければと思う。

参加者

地元から若い有能な市長さんに出られて本当にうれしい。加子母は、みんなと仲良くするのが基本的な考え方。ぜひ中津川市としては下呂と木曽を大事にしてもらいたい。加茂郡、加子母の場合は東白川村も関連があるので、ぜひお願いしたい。

その中でやっぱり道路が必要だが、なかなか実現できない。やっぱり地元が頑張らないとそう簡単にはできない。何十年かかるかわからないが作っていただきたい。

最終的には、材木といえども観光事業の中でやっていくのではないかと思う。特に加子母には大杉地蔵があり、800年前の歴史を持っている。尾張藩の山守として400年の歴史を持っている。最近では明治座の歌舞伎もある。観光資源は、歴史とみんなの心があるものでやっていく、地域づくりを作っていくと思っている。

林材振興会もみんなの力を集約できているので、市長は大変お忙しい中だが、また別の機会をぜひお願いして、これからも地域の振興のためにご尽力いただければありがたい。

市長

大変貴重な意見をいただいた。広くなった中津川市をより良くしていくことに併せて、近隣の人たちとしっかり連携をとりながらやっていくべきだと思っている。

リニアの開業は遅れるようだが、近隣の市町が非常に中津川市に注目している。木曽方面では、塩尻市から中津川市までの間は中山道で結ばれており、一緒になって今まで以上に盛り上げて、SDGsの取り組みも連携して取り組んでいる。

下呂市、郡上市、東白川村も、濃飛横断自動車を通じて、リニアが開業する効果を下呂温泉など観光面でもさらに伸ばしていくことにも注力し、一緒になって取り組む話もしている。中津川を起点にして、東濃地方の皆さんとも一緒になってやっていきたい。観光も林材業も、広めていく、活用していくことを一緒になってできないかと思っている。

リニア岐阜県駅ができるにあたって、岐阜県のビジョンの中で「森のまちづくり」というのがあり、私の公約にも掲げて、まちづくりをこれからやっていく。中津川市は8割が山で、この資源を使わない手はない。リニアに乗って中津川に来る方は、都会的なものを求めてくるわけではない。心を癒されに、自然、山や川を求めて来る。そういうまちをつくっていくには「森」というキーワードは絶対に外せない。

その森をどうやって活用していくか。林野庁でも、国有林を観光でも使えるような、森の中に入って、森林の中でエネルギーをもらって癒されて、また仕事をがんばってもらうような、そんなまちを一緒に作っていきましようと話した。

私の子どもが、小学校6年のときの親子キャンプで、グループで木を一本切り倒した体験をいまだにすごく楽しかったと言っている。そういったことを体験してもらうとか、もっと

もっと活用の仕方はあると思うので、一緒になって取り組んで、考えていきたい。
今日は本当にありがとうございました。